

昭和の南海地震体験談

氏名: 富士 順一郎(ふじ じゅんいちろう)
生年月日: 昭和8年3月31日
地震を体験した場所: 海南市船尾・自宅寝室
当時の家族状況: 父、母、兄、妹



1) 地震発生時の状況

当時13歳で自宅寝室で就寝中、激しい揺れで目が覚めた。ミッチミッチとかなりの横揺れで立つ事もできず、そのまま布団の中で揺れが収まるのを待った。長い時間揺れていたと思う。

2) 津波襲来時の状況

揺れが収まった後、両親に起こされ、着の身着のまま自宅前の広場に出た。揺り返しがあると危険だとの事で、家族全員が待機していたところ、近所の人達も出て来た。まだ夜は明けおらず、暗い時間帯で風邪等ひかないよう豆炭のこたつを持って来た。揺れが収まって15～20分程経った頃、近所のお年寄りの誰かが、「海に水が無い。津波来んのちゃうか」と言った。海は遊び場であり、馴染み深い場所だったので、水が無いとはどういう事なのだろうか、と不思議に思った。津波とはどういうものなのか

が解らなかつたし、ましてや、地震＝津波の認識など一般的に知られていない事だったので、近所の人達と3人で国道を越え、海を見に行った。薄明かり程度の空になっていて、冷水、塩津、戸坂の方まで歩いて行けるくらい海水が無くなっていた。「おかしいなあ」と言って暫くすると、遠くの方で「ゴオーツ」という例えようなない音が聞こえてきた。沖をよく見ると、何かしら白い線のようなものが見



えて、それがみるみるうちに高くなり、音も大きくなり、こちらに押し寄せて来た。「津波やぞ！こりゃあかん！」、そう言うと同時に3人で走った。足が遅い方ではなかったので、海辺から5分程度で自宅に着いたが、その頃には自宅前に水が来ていた。最初の潮は海から直接国道を越えて来たものではなく、内海、黒江湾からまわり込んだ水と、下水から地区に入って来たようだった。下水が溢れ、1m、2m、3mと5～6分おきに1m程水位が上がっていった。自宅が2階建てだったので2階部分に避難した。10分程すると水が引いて、またそれ以上に入ってくるという状態が5回程繰り返されたと思う。浮いて流された物で下水が詰まり、水が引かなくなり、最終ひさしから50cm程下の所まで水位が来た。大体道路上2m程度だと思う。この辺の地区の津波は、波が来るというものでなく、水位が上下するものだった。何も家具を置

いていない部屋の畳は、そのまま浮き、引くと元通りに納まっていた。

3) 家族の行動・被害

地震の揺れが収まってから家族と一緒に避難したので、怪我もなく全員無事だった。自宅は津波により1階部分のほとんどが浸かった。濡れた部分の壁が落ちたり、家財道具も使えなくなった。地震では物が落ち、タンスが倒れた。

4) 集落・周囲の被害

500m程離れた所に住んでいた同級生が、忘れ物を取りに行つて水の中に転倒し亡くなった、と後から聞いた。水は澄んだ透明ではなく、濁った泥水の為、水の中に障害物があっても見えないので、慣れた自宅内でも危険なのだと思った。周辺の住宅も同様に浸水し、それぞれ2階部分に避難して生活していた。

学校も浸水し、水が引いた後に泥のかき出しをしに行った。運動場には魚が跳ね、水溜りには魚が泳いでいた。片付くまで1ヶ月程度休校になった。学校付近に機帆船が乗り上げられていた。

5) 地震・津波後の生活

溜まった水は4日間引かず、2階に避難し、そのまま生活をした。フラフラ泳いできた魚をすくい食料にしたり、木っ端を燃やして暖を取ったり、子供だった為か、不自由は感じなかった。1ヶ月間は片付けにかかったが、中でも畳は干しても干しても乾かず苦労した。井戸に水が入り、使用できなくなった。両親がどのように対応したのか判らないが、水や食料に不自由さを感じた事は無かった。学校は約1ヶ月後に再開した。終戦直後で今のような組織的な防災活動はまだ確立されていなかった。役所からの支援物資は、毛布が2～3枚だった。

6) 次の災害への備え

災害所の避難経路、場所等を家族で話している。持ち出し袋を作り常備し、枕元には防災ラジオと懐中電灯を置いている。発生後2～3時間は自分達の手で切り抜けられるよう心がけ、自分の命は自分で守る事が大切だと思う。津波の場合は経験上、絶対に戻らない、水の中に入らない、という事を言っている。